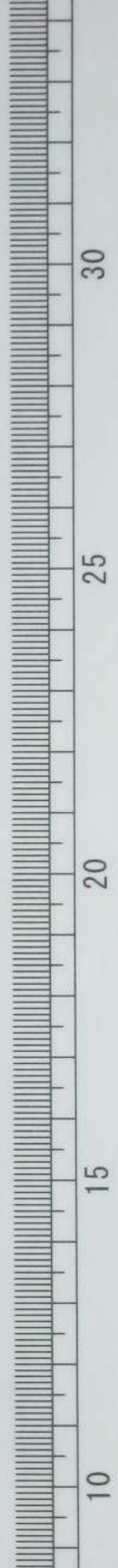


西洋易知錄

洋
368
3



門外
368
卷 9

東京大学
蔵書
學校圖書

西洋易知録卷之二

第二世紀

第一篇

如地尼安帝時代之事

帝羅馬の國法と改正と

河津孫四郎

譯述

伊太利王オドアセルを紀元四百九十三年に至るまで
國王の位よりしりしに此歳澳斯土羅俄的の王テオドロ
クの為に攻滅されたりテオドロクをカニオドロユスト
のへる大學士を輔佐とし良政を行ひしを伊太利國
よく治まり荒れなき田野を忽ち蒲萄米麦を生し美屋

明治三庚午年十月二日三四之冊末之

西洋易知録
卷之二
一
河津孫四郎

所^レ起^ル閉^ル金鐵山又開^キテオドロククを
 務^メて羅馬人^ヲと澳斯土羅俄的人^トと區別^シシ^テ羅馬
 人を舊^クり如^ク「トガ」を着^セし文官^トと務^メる俄的人^トを尚^ホ皮衣
 輕^ク省^シと穿^キし武官^トと任^ジり此^ノ如^クまこと凡^テ三十
 三年^ノより紀元五百二十六年^ノに至^リ此^ノ歳^ニテオドロク
 ク死^シしる^ルし^テ此^ノ國^ニは内亂^起り

テオドロクク^ヲ伊太利^ニ至^ル時^{ヨリ}僅^カ前^ノことふ
 るべし佛郎哥人^ノ首長^ニ哥路^易後^世路^易と^シて^シる^ル名
 ふと^シへ^テ豪傑^トソム河^ニ南^ニ渡^リて一^ノ舉^ニ羅馬
 人^ヲ不^レ再^レ給^ル農人^ト維西俄的人^トと^シて^シる^ル忽^チ里尼河^ノ三^ノ義
 より比里牛斯山^ニ至^リる^ル地^ニを平定^シし^テ紀元四百九

十六年^ノ哥路^易レ^イムス^ニ於^テ西教^ノ洗禮^ヲ行^ヒ此^ノ教
 門^ニ徒^ル後^幾程^ニあ^リ其^ノ都^ヲ巴勒^ニ定^メる^ル五百十一年
 此^ノ地^ニ於^テ薨^ジり是^ノ人^ヲ則^チ佛郎西^ノ國王^ノ先^ノ祖^ト
 して之^ヲ葬^リる^ル寺^今尚^存る^ル哥路^易ノ妹^ヲ伊太利王
 テオドロクク^ニ嫁^シる^ルこと
 是^ノより前^ニ如^ク地尼安^トの^人剛士^但知^ラ腦布爾^城ニ生
 ま^レり其^ノ叔父^ハダシア^トの^人處^ノ猛^キ農民^トして其
 名^ヲデヨステン^トの^人デヨステン^ト少^キ時^ニレオ帝^ノ
 衛兵^トあり遂^ニ東帝^ト西帝^ト國^既滅^ヒし^テ故^ニ東帝^ノ
 混雜^セ記^スる^ル位^ニ登^リし^テ如^ク地尼安^ノを教
 育^シて之^ヲ養^フ子^トふ^シる^ル紀元五百二十七年

如地尼安の叔父帝は継ぎて東帝とあることを得たり
 たり如地尼安帝の將ベリサリュースとつひに則ち此
 頃の名將あり此名將を波斯の戦争に大功を立てりね
 ば帝又之を命じて亞弗利加の合太爾人を征伐せしむ
 紀元五百三十三年九月ベリサリュース此地に到着し同
 月の中に加爾太額城まで攻寄り合太爾王ゼリメル
 之を防ましが遂に打破られしりバニミゲアン山
 に逃げ入りしが飢に堪へざりて降参しりねバベリサ
 リースを之を將と剛士但知腦布爾城に歸陣しりり時
 に分取しりり物り内は猶太の神殿をとりし處の名器
 あり抑此器の昔し羅馬帝チヌスに耶路撒冷城を乗取

しりり後合太爾王ゼンセリツの羅馬城を亂妨せしとき
 卷の一第五又之を掠めて加爾太額城に遷しりり今
 篇に見ゆ又ベリサリュース之を掠めて耶路撒冷の西教寺院に置
 きりりしり豈由来奇異あり器をとりりや
 後ベリサリュース又伊太利の俄的人を征伐しりり欽命
 を受けりりしり頃を紀元五百三十六年都城を離れ
 て悉西利に趣き此地を平定しりり後伊太利に渡り拿破
 里を打従へ羅馬城を乗取りりり俄的人の王ヒチニス
 散したる兵をラベンナ城に集め之を率てベリサリュース
 を羅馬城に圍りりり此時ベリサリュースの兵の負け

色もありしがベリサユース自ら兵士を先づち血相を
 侵して奮戦し多りしを俄的の寄手の打破らきて退
 きたり是日より數日の間を寄手の兵軍さの用意を整
 へ再び此城を攻懸るべリサユースを士卒を命じて
 固く城を守らしめ寄手の攻寄るを相待ち自ら矢を
 放ちて一矢を夷王を斃し二矢を他の夷將を殺しけれ
 ば味方の者共之を勢を得て城中より散るを敢たりし
 うを寄手の大を辟易して退きたり是より一箇年餘俄
 的に入此城を圍ふ屢之と攻つへども更は其功を成さ
 ことあり或時を城中より打壞き多し石像を投げけ
 らせ大敗を取りしこともありたり此時羅馬の教公に

ルベリユース俄的人に書簡を贈り城門を開くと約し
 たり事發覺及び城中と追出されぬ此項羅馬教公
 唯高位の僧
 官とりの權威ありていまは人君を去程は俄的人の遂
 又攻めたりとて自ら陣營を焼き拂てラベンナ城
 又退きたり時を紀元五百三十九年あり其前年伊太利
 の第二都米蘭城を佛郎哥人が為り毀たせしとぞ
 是は於て伊太利の國羅馬の管轄を屬しけれは僅に數
 年の間とつへども昔の如く東西合して羅馬帝の地と
 ありたりは実をベリサユースの功あり然し朝廷にて
 の之を妬む者却て多く中にもナルセルとつへる人の
 之を猜むこと一方ありは其落度を見付んとつへる念ひ

初め波斯王スシルハンアンチオク城を攻め破り
 耶路撒路城を攻めんと謀りしうバ帝ベリサリュースは
 命じて之を迎へ打としめーガベリサリュースを二箇年
 紀元五百四十一年の戦争を以て遂に之をイウフラーツ
 河の外に逐ひ退けしむ此時如地尼安帝大病の報告
 陣中に至りしはベリサリュース思ふに歎して嗚呼已に
 我后妃テオドラを位を譲らざるに相當したる婦人な
 り非むといひたるが諛者直ち之を以て帝に讒言し
 ねば帝大に怒りて之を召し返し直ち之を殺さんと
 したりけれども其妻アントニナ后妃は寵せられしう
 バベリサリュースを幸は死一等と宥され重き過料を命

去程は俄的人ハトチラスとワヘラ智勇兼備の人と首
 長とふし伊太利の地を復せんとして大に軍を起したり
 帝之を聞き又ベリサリュースは命じて紀元五百四十四
 年又於て僅の人真を以て此國に進發しトチラスを防
 がしめたるが衆寡相敵をること能はざれば遂に五百
 四十六年又於て羅馬城を俄的人に取られたり後一二
 箇月又してベリサリュース又此城を取り復し固く之を
 守りけれども伊太利の南地追々皆之を背きて俄的王
 又歸服しなればベリサリュースは獨り此城を守ること能は
 ざると以て五百四十八年又於て朝廷に歎願し歸國し

ありたり

ベリサリュースを兵破て都城を歸りしは佞人其間を乗
 一之を諂したるが幸は死罪を免られ平民は下をされ
 たり然るに紀元五百五十九年を於てブルガリアン人
 とワヘラ山^{ウラル}の夷多^ダ腦^ユ河を南に渡りて東帝の國を
 寇し都城を去と僅に二十里の地を入るるなり時を帝
 又ベリサリュースを擧て將となし之を防がしめたり
 ベリサリュース少き時の武勇を奮ひ直ち夷を追拂ひ
 て其功を奏したるが朝廷に於ては此時もまた恩賞を
 く之を免して舊の如く民となしをたり後程なくベリ
 サリュースを及逆を謀りしと讒言せし者ありしを朝

廷より其罪を以て家財を召し上げ家を蟄居せしめ
 り後ベリサリュースを免されたりけれども烈しく鞭
 うりしを免されたり後僅に八箇月を以て死したり
 今此名將の往来する腰を屈め袖乞をる所の古画を傳
 ふ是を昔の詩人画工の筆寫し多るなりとワヘラ山
 の史家の大抵之を信ぜり
 去程はナルセス上はのをベリサリュースに代り伊太利^{イタリヤ}
 の俄的人を逐ひ拂ふべき命を蒙りしを倫巴爾^{ロバール}ヘル
 リ匈奴三部の人と兵を合せて俄的人とタジ子^{タジ子}に於
 て合戦し其王トチラスを殺し容易く羅馬城を乗取り
 たり時を紀元五百五十二年あり其翌年即ち五百五十

三年に於てナルセス又トチラスの嗣王テイアスとベ
 シビュース山の趾に於て戦ひ之を殺し々ねバ俄的人の
 伊太利よりこの能く遂に盡く此國を去りより
 初め俄的人の以太利より来りしより是に至りて凡て六
 十年ありきてナルセスハ佛郎哥人及び亞列麻尼人と
 も又此國より逐ひ拂ひしうバ此功よりてラベンナ
 の城主に封じし數年の間以太利國を支配し威徳を
 示したり

如地尼安帝國法を刪改せし抑是まで諸帝の詔書愚
 くふるも曲まるも皆國法と定めしを以て國法甚だ繁
 く一件毎に十餘の異法あり及びしうバ人皆國法を

知りこと能くざりしうぞ是に至りて帝其不都合あり
 と知り則ちトリボリアン等諸學士と共に古法が多
 きを刪改其意を加へく足らざるを補ひ四部の法律を
 作りたり一云く改正舊法是を舊法を刪改しるるを
 して紀元五百二十九年に成業せり二云く國法の基
 源是を國中の學士に示さる為に國法の本理を説きし
 りそのよりして紀元五百三十三年に成業せり三云く
 民法全書冊數凡て五十冊よりして全備を是書ハ右同年
 より三箇年よりして成業せり四云く新定法是を如地
 尼安帝自ら作りし新法あり
 如地尼安帝在位の時戲馬の最負より都下り人民二つ

又分其一ハ青色組と稱し一ハ綠色組と號して互々競
 ひ争ひしが帝ハ青色組を最負しければ綠色組の者大
 不平を懷き遂に紀元五百三十二年に至りて謀叛を
 起し五日の間都下を亂妨し多くしらば帝ハ恐みて出
 奔せんとしければ后妃ハ更之を恐るることおく
 遂に之を打平らけしうバ此時誅戮せらるる綠色組
 凡そ三萬人及びたり○支那人是まを緇系を作らる
 法を秘して傳へざりしが此項支那へ行まらる二人の
 僧其杖の中ハ蠶卵を隠して歐羅巴へ歸り之を此地に
 傳へたり○如地尼安帝二十五箇の寺院を都に建て
 きたり其中の最大なるハ聖曹費亞寺院あり○羅馬江

蘇耳の官位昔ハ重き任ありしが中頃唯靈蹄とあり紀
 元五百四十一年に至り此名全く滅びたり但し詔によ
 りて此名を滅せしハ此より三百年後ることあり
 如地尼安帝ハ紀元五百六十五年に殂落を時ハ年八十
 三歳あり帝ハ子ふきを以て甥ジョスチレ繼ぎて帝と
 あり之をジョスチレ第二帝とつハ如地尼安帝ハ英敏
 ありて温仁ありしとつハ惜む我性惡しき后妃の
 言を用ひたりを以て其政ハ不正の事共多うりま宗音
 の事ハ付てハ此君兇暴の政多く少きと知ハ數耶蘇の
 真教を奉せざる者を誅戮しるが晩年乃至りてハ自
 ら耶蘇の真教を棄て其派教を奉しるるとぞ

此頃北狄倫巴爾人多腦河の方へ攻め来るるも又ア
 バルス人とも巧とある烏拉山ウラの夷土身其人は攻
 めるをせしうバ山を棄て多腦河の方へ来り遂に倫巴爾
 人と兵を合すくゼビデー人とつひに此河の邊に住
 める夷を攻め其首長を殺しつゝ倫巴爾王アルボイン
 其腦蓋骨を盃と作りしめ且つ其女ロサモンドを夫人
 とおしより去程アルボインの盡く侵掠の地をア
 バルス人又與へ自ら兵を率て牙白山を越へ伊太利の
 北地を侵掠し則ち伊太利王と歸しつゝ時より紀元五百
 六十八年より今倫巴爾治とつゝる地の倫巴爾人の侵
 掠せし處あるの斯くの名づけしあり後程よくアルボ

インを賊の爲に殺されつゝ初め酒宴のときアルボイ
 ン其夫人は強ひて父の頭をて作る盃として酒を飲ま
 しめられ夫人の之を恨みて遂に此事を謀りつゝお
 ぼとぞアルボインを継ぎたる王クレーフを位に在る
 こと僅に十八箇月として死しつゝ此間其國を
 ベ子ロンバルドヘンチユムで横けつゝクレーフ死してより十年
 の間倫巴爾人再び王を立ちて三十六の公侯其國を分
 て支配しつゝ政甚る善くつゝよりしう紀元五百
 八十六年倫巴爾人オータリスとつゝへる人をして
 王とおしより是をより殆ど二百年の間ハ伊太利の國
 二分して一ハ倫巴爾の王を歸し一ハラベントの城主

屬し

紀元第六紀間東帝即位表

帝の名	紀元
アナスタシウス	
ジヨスチン第一	五百十八年
如地尼安第一	五百二十七年
ジヨスチン第二	五百六十五年
チベリユース第二	五百七十八年
マウライス	五百八十二年

第二篇 教公の權勢盛んなる事

團 紀元五百九十五年教公グレゴリ
 剛士但知腦布爾の高僧又書簡と
 贈

羅馬教公の權勢ハ甚ど曖昧として今より之を知ること
 能はば耶蘇の高弟又ガリレアの漁人彼得とつへる
 紀元六十六年頃又倒磔の刑又處せしむるし名僧りし
 ガ羅馬教公を顛負する輩ハ皆此彼得を以て羅馬教公
 の先祖ありとせしむるは是とて慥にあり証據あり
 ことばにゆゑに彼をそとせしめられ角せられ昔し羅馬の教公ハ郭
 外又廬と結び多る貧しき僧より初めの世の人更

尊まざりしと疑ひおし後西教の制禁盛ありし時及
 びし其頃の教公ハ實ニ皆潔白にして真神を信ぜり
 こと厚く有りたる名僧ありしハ誅戮せらるる者多
 かりたり第一紀より第三紀までの間ニ教公とありし
 僧三十人ありしが其うち十九人の殺されしと云ふ
 耶蘇の生きたりしよりいまだ一百年に至らざるニ耶蘇教
 門の寺院諸國ニ満多りたり初め此等の寺院ニ於て奉
 ぜり所の耶蘇教ハ希臘教ギリヤ耶蘇教の一派として今昔西
 方より其語言經文及び禮拜の儀式に至るまで皆希
 臘を用ひしが後紀元二百年の頃ニ至りテルチユリアン
 と云へる名僧亞弗利加アフリカニ起り臘丁語の經典を著せし

より臘丁ラテンの耶蘇教と云へるもの興りしあれば此教門
 の始原ハ亞弗利加アフリカよりと云へるも羅馬城を其頃既
 ニ開々し地方の中央ありしが故ニ西洋諸國耶蘇教の
 徒皆ソツシク羅馬の教公を以て耶蘇教門の本流の如
 く思ふに至り
 然る所紀元三百四十三年ニ於て諸國の僧徒サジカニ
 會し教門を付き決せざることありバ之を羅馬の教公
 ニ許へんことと議定したるより教公の權勢又更ニ盛
 んとなり紀元三百六十六年僧ガマラスの教公とあれ
 る頃ニ於てハ諸國の僧皆争て此官を撰まざることと
 欲せり及びたり尤も此頃剛士但知腦布爾城の高僧

ハ羅馬の教公と勢を競ひたり

羅馬教公のうら其權勢を盛んあらしむるは最力と盡

しあるものなりインノセント第一レオ第一グレコリー

第一グレゴリーとゾザの三教公ありたり

インノセントを紀元四百零二年より四百十七年オノリュース帝の

時法位を即さし教公あり此人常は羅馬教公の位を以

て萬國高僧の上を立あらしめんと欲しりることハ其嘗

て西方諸國の僧徒を贈りり書簡の文を見て明ら

知るへしきて俄的王アラリックの羅馬城を攻寄せたり

しやオノリュース帝ハラベニナを匿きて更は羅馬城を

願ひざりしがインノセントを城中よりしりしは城中

の又基督教公のとも頼と又思ひたり然し此時ハ羅馬城

より金を以て夷と與へ幸して和睦を為さしことを得

たり後幾程もふく夷狄又攻め来りしが此度ハイン

ノセントも又城中よりしり是より前ハ教公ハ帝と諫

て諸夷の征伐を為さしめんと欲し自らラベニナを趣

きしが故ありきて教公ハ諫言用ひりしは都城を歸り

し處都城ハ既ハ夷狄の爲は狼藉せりし城中大半灰燼

とあり舊き教門の寺社神像等咸く滅びしりは是より

耶蘇教門日々盛んあり時至りしを以て教公の權勢

彌益しりり

インノセントの法位を在りしときハ當りて英人ペラ

ジリスといふ僧起りたり此僧を在来の耶蘇教の説
 と違ひ人皆蕪罪を負へるといふとは誤りて人の各
 己まの見識と行ふことと得まの神と拜せども自ら
 神の命を背きざることと得べしといふ説を唱へて羅
 馬亞弗利加及びパレスチンと旅行しり然るは亞弗
 利加なるヒッポリビツ僧はオーギュスチンといへる名
 僧よりパラヂーヌの説を誹謗して在来耶蘇教の正し
 きことと説法しりるが諸國の僧オーギュスチンの説を
 以て正統耶蘇教の本旨と定めりりても教公インノ
 セントをオーギュスチンの説に従ひ諸國の僧は命じて
 パラヂーヌと教門の反賊と辨はしりり後幾程も不

くインノセントを卒しけねば之を継ぎし教公ジ
 スペラヂーヌと追放しりり後パラヂーヌを如何かふ
 りし史家之と傳へむ
 レオ第一紀元四百十年より四百一十一年至り
 法位を登りし教公あり教公ハ羅馬城中に於て生れ
 人として常に羅馬教公の權を大なることと務め且つ
 教門を背きし僧徒を嚴酷に罰しりり上卷にもいへる
 如く教公ハ匈奴王アチラと説て羅馬を去らしめられ
 りり三年の後舍太爾王センセルクの羅馬城を攻め寄
 せしとも亦之を説きまたり但し此時ハ其言聽せざ
 りしといへども之を為す夷王の羅馬城を狼藉せんと

欲する氣力大に減しよりいとぞ

羅馬の教公追々權威を得しこと此の如し其唱る所の

教は於てハ別々許多の僧有りて教公の為め之を

廣めたり其中の最尊むべき聖僧ハゼローム卷の一附記

アンブロースハオーギスチンの三僧ありゼロームハ

嘗て教公クマシスの書記官と務め後ベトレームの

門とありモナスチスムとて寺に入ると世俗と交

らざることを始めし僧あり「モナスチスム」といふこ

とを教公の教を弘むる大に利りしといふアンブ

ロームハミランのアルチビッポ僧あり官が嘗てテラド

トース第一帝のテッサロニア人をと鑿とせし罪を聲し

帝として久しき間懺悔を為さしめ僧の威權ハ帝王の

上より多しきことを唱へたりオリギスチンハ既上

は説く人皆此僧を稱して臘丁教の祖ありといふ我

敢て之を當らんとせむ

羅馬國を滅し多し諸夷の中俄的人先づ耶蘇教を徒り

其他の夷も追々此教門を徒りし程は羅馬の帝國ハ滅

びしといへども羅馬教公の權威ハ益盛んとありしを

以て羅馬城ハ天下を冠りし昔の威權を失はざる

の事ありん教門ハ天下人民の心神を服せしむること

あれば舊羅馬の兵力ありしよりも却て遙々盛んとい

ふべきあり

グレゴリーゼグレイトを紀元五百九十年より紀元五
 百九十年は法位を即きし教公ふろが羅馬教公の威を
 盛んにせし三教公の一として又臘丁教の祖と稱せら
 せし人ありたり其いまだ法位を即ぐべしレントアンデ
 レウの桑門たりしとき羅馬の奴僕市にて英産の童子
 を見しが頻り其美を感して英國を西教を弘めん志
 を生し後法位を即くに至りて直ちオースチンを
 法使となし英國を遣したり此教公の時當り西方の
 諸國是班牙亞弗利加英國に至りて耶蘇教の弘まる
 ざる處ありたり然る猶太教及び耶蘇教の諸派を
 奉る者をつへども嚴酷を之を罰することありし

の賢りたりる教公とつへべし此時當り剛士但知腦
 布爾の高僧ハ約尼とつへる人として萬國高僧とつへ
 尊號を稱せんことを欲し諸國の僧を之を望としが
 レコリー則ち約尼は書簡を贈り萬國高僧の稱の昔し
 諸國の僧カルセドンに於て會議の上羅馬教公の先祖
 聖波得を獻じたる號ふれども其後の教公の皆此號を
 稱するを他國高僧に對して害ありとて棄らざし稱を
 て之を稱するの神意を背たる昔を説きまうり時紀
 元五百九十五年ありきて又倫巴爾人屢羅馬を攻め來
 りグレゴリーを惱ましめりて遂にグレゴリーの
 智徳を屈して咸く耶蘇教門を徒まり紀元六百四年

レゴリノ卒を此人ハ僧ノ職ハ言ふも更アリ政事文章
ニ至リテも善クセザル者アリテ教公多シトソレドモ其
上ニ出ル者アリテ

是ヨリ一五十年ノ後佛王北比諾伊太利ノ北地ニ於
テエキサルケート及びペンタポリスニテ教公ステート
ニテ贈呈シヨリ教公又領國ノ權ヲ得ヨリ

第三篇

馬疴美德ノ事并ニ田々教ノ事

要紀元六百二十二年馬疴美德ノ事

ナニ奔リ

第六紀ノ項亞刺伯國ニ如何アリ種住ハククヤト尋

クニ中國ノ平沙^{タム}ノハベドリーイン人トソレテ夷黒キ幕ヲ
張リテ所々ニ散居シ海岸ノ地ニハ商人農民ノ住ヘ
小屋多ク又波斯猶太希臘等ノ人其中ニ雜居シクク其
項土民ハ日ト星トヲ禮拜シ大アリ寺ハメツカ城アリ
カーバトソレテ寺ニシテ寺中ニ黒石ヲ安置シクク人
皆此石ハ神ノ使メ化シ多ククニシテ初メハ純白色
アリシガ罪入ノ觸レニシテ以テ今ハ黒クアリシアリト
語り合ヒクク此國ノ風ハ詩ヲ好シ又亂妨戦争ヲ好シ
ク

紀元五百七十一年亞刺伯國メツカ城ニ馬疴美德とい
ヘク人生活クク其父ヲアブダラといヘクカーバ寺ヲ

預る貴人ありたり其母ハアミナとワヒて宗門と名者
 の女ありしが馬疴美德六歳の時両親とも皆死しり
 トウバ叔父のアブタレブとワヒる商人馬疴美德を引
 取り其家ニ養ひたりされど少き時より叔父の為ニ駱
 駝を引きて諸國ニ商賣をふし教シリーアエーメンの
 地ニ趣ましし程ニ種々の昔譚を聞き耶蘇教の説ふと
 も聞き只管之を感じたり年二十五歳の時カチアとい
 へる富商寡婦の番頭とありしニカチアハ時ニ年四十
 歳より年齡大ニ馬疴美德と異ありしとワヒどもワ
 あり縁ヲや馬疴美德の才美を戀慕て遂ニ之と夫とふ
 し借老同穴を契りたりきて光陰矢の如く紀元六百十

一年とあり今茲馬疴美德ハ四十歳とありたりその
 数年前より馬疴美德ハ山中ニ趣き竊ニ經史を學び
 心ヲ摧きて百般の工夫を凝しりしが此歳始りて妻カ
 チア從弟アリ家僕ゼード親友アブベケルの四人ニ語
 りてガブリエルとワヒる神使降りて我ニ百般の正理
 と告げ新ニ宗旨を作して諸人を善ニ導くべしと命せ
 られしと物語りたり其説く所の天ハ唯一箇の神あり
 馬疴美德ハ神ニ代りて神意を諸人に諭さば命を蒙
 るべしと入ありとワヒることを大目とふやリ宗旨の名ハ
 「イスタム」教即ち回教とワヒり「イスタム」とハ從服とワヒ
 ことよりして人ハ神ニ從服をばませりあり

馬疔美德法を説くこと三年よりして僅か四十人の弟子
 を得たりしが尚も之を弘めんと欲し則ち親戚を家
 招ぎて神を命たりしよしを語り誰より我を助るを法
 と弘めんやとつひたりアブダレブの子アリ時二十
 四歳ありしが席を立て馬疔美德に向ひ我をこそ君の
 為に法を弘めまゐらせんとつひしが其餘の人と皆
 狂氣せしあゝんとて嘲り笑ひありたりメツカ城
 中の入る之を聞き皆馬疔美德を惡としろバ馬疔美德
 を城を去り志づらく叔父の家を客居し此に於ても又
 法を説き後メツカ城を歸りしが其頃叔父死去しこれ
 今ハ馬疔美德を守護する者なく城中の貴人等遂に

相盟て馬疔美德を害せんと謀りしろバ馬疔美德の弟
 子アリよ巴島の衣服を着せし其寢室をわらしめ其身
 ハ夜半に城中を遁出しアブベケルと共に一洞中に匿
 ること凡て三日よりして稍く此洞を出て遂に絶元六百二
 十二年七月十六日又於てメツカ城に入るとり此地に
 ハ弟子多々れあり今ハ尚回教を奉むる者皆其日
 を名々に「ヘジラ」と稱し其日より年月を算ふるにメ
 ツカ城に於て馬疔美德の始りて寺院を建て此に於て
 回教を説法しり後馬疔美德の死骸を葬りしハ是
 寺院あり

馬疔美德メツカ城に入りし後兵力を以て其法を弘め

んことを欲し則ち云く神が為に戦へば則ち天堂の上
 かへし神を敵し戦へば則ち地獄に墜つべしと説法
 して弟子の闘心を勵ましけり
 紀元六百二十四年馬荷美德弟子三百十四人を率ひて
 ベーデル谷に伏し居りてカスナ許りシロリアより歸る
 路を蔽ひ北へを逐てカスナ城に至りけり此時掠めし
 物の内は名作の劍一振り後馬荷美德常之を帯び
 しとぞ其翌年メジナ城の北教里よりオホト山に於
 て馬荷美德又メカ人と戦ひ我兵敗る其面部は疵を
 被りけり然し勇氣逞しき馬荷美德是等の疵をば事と
 せしむ又カスナの大將アブソヒアンの兵と戦ひ大に之

と破り威名を近隣に轟かしけり其後馬荷美德千四
 百の勇弟子を率ひてカスナを攻め寄せけりときハカ
 の人敢て之に當らんとせむ者なく一同は和睦を乞ひ
 けり是より於て馬荷美德カスナと十箇年の和睦を盟ひ
 けり
 此頃亞刺伯の北地に於てハ猶太人兵と起りて馬
 荷美德を討んと謀りしハ馬荷美德兵を轉じて猶太
 人の要城カリバルを攻めけり時ハアリの緋色の衣總
 鐵の鎧を着し諸軍は先づら奮戦せしが楯を失ひる
 りしハ門の扉を引搦りて之を楯とふして戦ひけり
 さて其城遂に落りしハ馬荷美德城に入り食物と

命ドクク小猶太の少女羊の肩と煮て獻じたり馬疴美徳之と喰ひて味の常と異ふれり疑ひ餘りハ之を棄てたり然れども此肉ハ原と毒藥を混ざりて其の味をバ馬疴美徳と全身忽ち痛とて生し多く之を食ひし弟子ハ死にたり程なく馬疴美徳ハ病愈たりしとツレども大に健全を損したり

此勝利より馬疴美徳の威名亞刺伯の轟き國中大半之に服したる程に則ち東帝ヘラックニス及び波斯王コスルニスハ許し使節を遣し回く教を従ふべきよりハ贈りたりガコスルニスを怒て其書簡を引裂きヘラックルニスも更之と悦ばざりたり然りとあり

アは於て馬疴美徳の使節害せしむるバ馬疴美徳則ちゼードを立て將となし兵を率ひてメヂナを出立し東帝の國に發向せしめたりきてシタ死海の東とハ人處して兩軍會戦し東帝の兵大に敗せたり然れども我將ゼード及び副將二人打死しり
 紀元六百二十九年馬疴美徳が城を取らんと欲し一萬人を率ひ銜枚速行して敵の意外に出で城外に於てアブソソヒアンを虜にし白刃を以て之を切して回く教を従らしめ則ち之を放し城中に歸し城中の人を降参を勧めしをたりされバ一人として我兵に當り者ありたりれば馬疴美徳ハ堂々たる三軍を率ひてガ故

郡ありメカ城に入るとり城中擧げて回く教は歸順し
皆賀し云く神の功德廣大よして馬疴美德ハ其輔翼
ふんと此と云く回く教は從くべして誅せんとする者三
百六十人ありたり

馬疴美德又シリリアを攻む時其將カレトの兵ハイ
ウフラーツ河よりアイラ城紅海の東に地を掠め
り此城ハ亞弗利加に入るとり要地ありば之と取りし
より回く教の亞弗利加は廣く多き道開くよりきて
も馬疴美德ハダマスキヌ城に向て發しりるガタブル
クと云く夢より兵を引返しメデア城は歸りたり

馬疴美德時年六十一歳よりして熱を病む紀元六百三

十二年六月七日卒去しり病の根元ハ先年羊肉中
の毒より中り又且つ愛子イブレームの死しりるを以て
精神弱りしより起りしありと云く馬疴美德ハ偽を以
て人を誑き多き惡僧ありと云くども其大才多智の實
は感歎をへし

馬疴美德の説きし法の其死後アグベケルの纂輯せし
「コーラン」經に載せたり「コーラン」經ハ神使の告げしと
詐して馬疴美德の追々説き出したるを高弟子謹て之
を椰子の葉及び羊の骨に記し置きりるを輯めしあり
別は又「ソナ」經と云く馬疴美德の言を集めたる書
ありと云く「コーラン」經ハ如くと云ふ

回く教の至要あり法の左の如し

一は神の唯一箇の如し

二は各位の神使あり其中はイギリスとワヘンをア
ダムを禮拜せざりし罪よりて天堂と放逐せられ
し神使あり又ゼニ及びペリスとワヘン死を乞ふ罪
を侵し多る神使あり

三は神通力あり人六人あり曰アダム曰ノア曰アブ
ラハム曰モーゼス曰耶蘇曰馬疔美德是也あり

四は地獄天堂あり天堂の美驚くべく女色の樂盡を
なする樂地あり

五は人の自己の意の如くすること能くは萬事天命

の如くよりて入得て之を變ふる事能くは

信心は回く教を奉る者の四箇の業を行ふ

一は手足を洗て毎日五度メッカ城に向て禮拜する事

二は我家財の十分一を以て窮民に施する事

三は「ラマダン」の月の教曆三十日の間日出より日没ま
で斷食する事

但し家猪の肉及び葡萄酒の平素とワヘンども食ふ
ことと許さば

四は一生に一度の必をムッカに參詣する事

但し代參してもよくとす

馬疔美德の卒去せしとき其位を繼がんと欲せし者四

又けりたり一ハ馬疴美德の最愛せし妻の父アブベケ
 ルニハ第二の妻の父オマル三ハ二女の婚オトマン四
 ハ從弟アリてハチマとワへる馬疴美德の女と娶り
 一又ありアブベケル遂ハ馬疴美德ハ繼ぎ亞刺伯王と
 あり自ら^{カソッ}嗣王と稱しけり其時ハ於て勇將カレットイウ
 フラーツ河の邊りハ回ク教の屬國を建て又進てダマ
 スキス城を圍と紀元六百三十四年ハ於て遂ハ之を下
 し其同日ハアブベケル薨しけり
 オマル之ハ繼ぎて^{アラビヤ}亞刺伯王とありしが王も亦シロー
 アの戦争ハ已りて六百三十七年ハ耶路撒冷と取
 りしけり則ち此城ハ入りしハオマルを為^ハ又侈奢を好

まざりければ是時粗^ウき髪毛布の衣服を着て鶯色の
 駱駝ハ乗りその頸ハ二箇の囊を結ひ付け其一ハ米
 を入き一ハ水を入きしとぞ今耶路撒冷ハオマルの
 寺院けり是を則ちオマルの建てしものあり去程ハオ
 マルの兵又アレッポアンチオクハ二城を下しければシ
 ーリアの地盡く平定しありけりオマル則ち又其將ア
 ハルヒヤ^{エジプト}を攻打ししめハ六百四十年ハ於て
 此國第一の都亞カ山大城我兵ハ降りけり亞カ山大城
 ハ珍書の庫けりしが回ク教の兵之を燒きしとワへ
 る人多^{ホント}けりしとワへども近來の學士ハ皆其書庫ハ馬
 疴美德の時より前ハ滅びしありんとワへりオマルハ

又別一將と遣して波斯を攻めし免々るは此戦争も亦身方より利多くてカテシアとワハ處を兩軍三日の間戦ひしは我兵波斯の兵を打破り三萬人を殺し旗章を奪ひたり我兵勢も乘て波斯の都マダインを取ら又ナハベンドに於て合戦し我兵之を勝ちしは波斯王エズゼルドの國を棄てて出奔したり波斯の國邊に歸服しるるをオマル則ちイウフラーツ河の邊に二城を建てて此地の平定を謀りてバソラ城の波斯灣に近きと以て交易繁昌の地とありクハを回王の都とあり是に於てオマルハシーリア埃及波斯の三國を平定し其功大ありと云ふ

ども憐むへし嘗てノジナ城ある寺院ありは波斯の火神と拝する者あり傷々々々後日ありて薨じたり時六百四十四年あり
 オットマン王とありは時に於てシーリア侯モアウヤ兵船を造りて東海に浮びシープリュスローテスの二島を攻取りローデス島に於てコロシユスと云ふ青銅の巨像を打壞さたり紀元六百五十五年オットマンメジナあり其家に於て賊あり為に殺さるる時二年八十歳あり
 アリ則ち亞刺伯王とありは不平の者甚く多く時はシーリア侯モアウヤ謀反し紀元六百六十一年アリ賊

り為^レ弒^スせられモアウヤ位と繼^グがりモアウヤを亞刺伯國オミヤ朝の高祖あり

モアウヤの時其子エジト父の命と奉^ジて剛士但知腦

布爾城^{ブル}の發向し紀元六百六十八年より六百七十五年

中^ナ七箇年の間之と攻めしうども攻むる毎^ニ希臘火

物^{モノ}と混^マる^ル油^{アブ}他^タの爲^ニ打破^ラれしうバ亞刺伯の兵

ハ皆辟易して歸國しう此より四十一年の後亞刺伯

人再び此都城を攻めしう然^レも亦利^ハう^ズぎ^マき

然^レりといへども地中海の南岸に發向したる亞刺伯人

ハ之^レ又^シして利多く其將アクバ勢^ハ乘^リて直ち^ニバル

バリー全國を横行し紀元六百七十四年^ニ於^テ今^ノチ

ニス^ノ近邊^ニカイロアンと^ワへ^ル一城と築^キたり此

地後^ニ亞弗利加^カ北地の大都會とありき^レもバルバリ

一の土民等^ハ其兵を追退^スんと欲^シて種^々の企^テを

ふし^テり^テれ^ルも一^トして破^ラれ^ルこと^ハよく亞刺

伯の勢益盛んとあり^シニ^レレ^ニトリ^リポ^ーの二城を^下

し六百九十八年^ニ於^テ加爾太額城^{タル}をも亦^ハ打壞^スき^タり

く^レり^テ十三^年より^テ亞刺伯人^ハ遂^ニ此地を平定^シ又

是^レ班牙^ハを攻めんと其用意を為^シたり

第四篇

佛國^{フランス}「メロウインダアン」朝諸王并^ニ執政

の事

要紀元七百三十二年查理馬突耳亞
刺伯人とツールスと戦ふ

メロウインデアン朝の王ハラモンド紀元四百十八年位即
りけより凡て三十四王ありと云此朝第三の王ハメロウ
グとウヒーよりメロウインデアン朝と名づけしあり第
五の王ハ則ち哥路易とて既上にもウヒー如く佛國
と起しとる人あり

紀元五百十一年に於て哥路易薨せしとき其國分裂し
て數個の君之を支配し佛郎西國遂に四大部分に分け
り一ハニューストリアとて羅爾河の北をウヒ二ハオー
ストラシアとて里尼河の東をウヒ三ハアコイティン

とて羅爾河より比列尼斯山に至り四ハボルゴンデー
とてサオシ羅尼二河の流るる所の地をウヒとて後佛
國王ダゴバルト第一紀元六百三十八年即位の時至
り佛國一統しとるが其薨る後又分裂し其亂以前より
過多り

國王の代々皆懦弱ありしうが執政遂に權を擅よりけ
きの執政を國兵を領し軍用金を預るを以て其權恰も
人主の如かりし執政のうちに最有名あるハハリスタル
の北比諾及び子查理馬突耳孫北比諾布列布の三人あり

オースタラシア公北比諾即ハリスタルを佛王テオド

ルッ第三の時執政とありテストリとワム所にてニュー
 ストリア人と戦ひ勝利を得たりしうバニーストリア
 とも亦其支配地とふし後ニーストリア及ひホルゴン
 チーの地は其子と封して代々執政とあることと謀り
 たり北比諾の紀元六百八十七年執政とありコロイン
 及びアイタスラシヤペルを執政府とふし佛國を支配
 せしること二十八年より卒去したり

北比諾の子查理カール七百年父を繼てオーストラシ
 ア公とあり七百十九年執政とあり國政を擅よりたり
 然るに國王の田舎に住ひて麥屋鳩舎の中を暮し或は
 又愚るある顔色をして怪しきある牛車に乗るたり唯

髪の毛平入より長きを以て僅か佛王の徴しと失の
 ざりしのみ

查理の執政よりや日耳曼の諸夷を歸伏せしめんと
 欲し盡く佛郎哥人佛郎哥人を民兵とふしより然し
 いまご其志を果さばりし外に一箇の大事事件起り

其大事件とい何ぞ今之を下の説ん
 亞刺伯人紀元七百十一年にジブラタルの海峡を渡
 航して是班牙に到りしが遂に唯西俄の入り都城セ
 レスに攻め落し勢を乘て是班牙の大半を打平け又比
 列尼斯山を越へて佛郎西の南地を攻め入りたりアコ
 イテロン公イウド之を迎へて戦ひしが其兵も亞刺伯

人又打破られしうバ亞刺伯の兵ハ彌破竹の勢をふし
 羅爾河の邊り又至りり時又紀元七百三十二年あり
 查理之を関き佛郎哥入を率ひてツールスとポイクチ
 ールスとの間あり一野又於て亞刺伯又と戦ひ大又之
 と破り首を斬ること三十萬級ありしうバ亞刺伯人の
 皆辟易して是班牙又退きりり是時又當て若し查理の
 武功ありりせば西歐羅巴の諸國皆回く教又歸順せざ
 るを得ざるべし其功宣大ありといえざるをらんや
 借も查理ハ再び日耳曼諸夷の征伐を企て容易くバハ
 リアン撤克遜フリシアン三種の夷を打従へり但し
 查理ハ軍用金を取立り毎又寺院とつへども之を免を

ことありしうバ國中の僧徒等其功德を稱美せざり
 たり○羅馬教公グレゴリ第三查理又聖波得の墓の
 鍵を贈り且つ「コンシユル及び「パトリシ」の尊蹄を予
 へ教公を助りて倫巴爾人を伐つことを頼としが查理
 を國內の事務繁きを以て之を承諾せざりり
 紀元七百三十七年佛王シルリ一薨しりりが查理其嗣
 を立つることふく自ら佛郎西公と稱して七百四十一
 年まで四箇年の間佛國を支配し此歳又卒去しりり其
 二子北比諾カルロマンの二人繼て執政とあり又佛王
 と立てしが程ふくカルロマンハ僧とありて伊太利の
 一寺又入りしうバ北比諾獨り國政を行ひりり

北比諾布列布ハ父查理と違ヒ僧家を懐なくすることと欲
しくねハ撒克遜サクソンの僧ウニフット後マエンスのア専ら
此事を助けあり

諸も「マロウインゲン」朝の諸王ハ以前より唯名のみと
して權威ふま君とありしところ羅馬教公より数度倫
巴爾人を打ちられよと北比諾の許へ頼み来りしと北
比諾を教公を身方とあしめて篡位を謀んと欲しくねど
教公の頼むと承諾し且つ教公は言をしめて云く其威
權けんと有つ者と名指めしと有つ者といつがまき王まきと
ま教公願ふハ之を決せよと教公此時の教公をサ直ち
又威權けんの者王位又昇て可あらんと答へしくハ北比

諾則ち佛王ナルゲルク第三を廢して一寺を繼し自ら
佛王と號しく是をカルロウインゲン朝の祖と
北比諾を二度即位の禮を行ひ一度ハポニヘ即ち
アリト之を冠らしめ一度ハ教公ステーヘン親ら羅馬
よりレントデンス又到りて之を冠らしめく
諸も北比諾ハ羅馬教公の頼むと應じて伊太利イタリヤを發向
しエキササルゲートペンタポリスを攻め取りしく之を
教公は獻じて恩を謝しく上又も云へくが知くこれ
よりして教公一國の君とあり
北比諾の功只是のとは非む又撒克遜人サクソンを打従へアコ
イテーンを攻め取り亞刺伯人アラビヤを追捕ひバハリアン人

と降し其屬國とふし其紀元七百六十八年北比諾薨
を子カルロマン查理の二入國を分て領しカルロマン
を南部と王とし查理ハ北部を領せり此查理とワハを
即ち高名ある查理曼の事あり

第五篇

昔し歐羅巴に住ひし諸夷の由来を述

ぶ

昔歐羅巴に住ひし民多くハ追て亞細亞より徙りし
ものよしとて大に民の移住せしこと四度ありたり第
一は徙りし夷ハ希臘伊太利の國に住ひ第二は徙り
しハセルツシンブルの二民より是班牙佛郎西不

列顛の國に住ひ第三は徙りしハ日耳曼人よりて歐
羅巴中央の地に住ひ第四は徙りしハサルマチアン
人即ちスクリアホといふ夷よりて東北の地に住ひ
たり然る蒙匈奴人烏拉山より來り韃靼人裏海より
來りてさるとサルマチアン人の住ひし地に移り住め
り

東の方より新しき住民の徙りたり毎に其前より徙り
し民ハ又その地を去て西及び南の方より徙り或ハ相
互に混合し或ハ舊民と雜居しこれハ遂に中古近世
の歐羅巴に民種各種あり至りしあり
日耳曼諸夷の大なる者の俄的人佛郎哥人含太爾人

倫巴爾人撒克遜人スカンデナヒヤ人あり
俄的人ハ原トスカンデナヒヤ國昔シ瑞典椰耳瓦ニ國ヲ合テラク名リ
ルニ住ヒシ青眼黄髮の夷あり今此國ニゴドランド
ゴデスコンジヤ俄的人ヲ城ニゴットランド等の地名云ふ語あり
のりヲ以テ之ヲ證スベシ然シ土着ヲ好まざるハ開
けざる民の常ふれば俄的人也亦本國の沼澤森林中
ニ長居スルことニ満足トシバ紀元二百年頃ニ始メ
テ南地ニ出デムルシガ直チニ歐羅巴中央の地ニ至
リテ三大部ニ分シ各諸所ニ住居スベキ地ヲ撰ミけ
テ三大部トシ維西俄的西俄澳斯土羅俄的東俄の
デーの三部あり俄的人を日耳曼諸夷のちちて最

開カシメテ早く西教但シ亞流の教ニシテ正統の西教ニシテ
徒リシ夷ありその瑞典スウェーデンヲ去リシヨリ二百餘年ニシ
テ酋長アラリック羅馬城ニ攻メ入りテ卷之一維西
俄的入のその後イスパニヤ是班牙ニ行きて一國ヲ起シ七百十
一年ニ至リテ亞刺伯人アラビヤの為ニ滅スルセビデー人ペルシヤ
ウスタラ河の源の周リニ住ヒ後多腦河の邊リニ徒
リシガ倫巴爾人の為ニ滅スルス澳斯土羅俄的人ハ羅
馬國滅込後伊太利ニ住ヒシガ此地ニ於テその滅
込シムルことハ既ニ上ニツヘリ俄的人ハ野獸の皮
ヲ着粗末の皆ヲ穿チ太き股引ヲ腰の周リニ革ヲ
縛リ附ケル夷俗ありシとツヘども我々思ふニ其

民を功德盛んある開化に至るべき人種あること必
 ずり是も何故ぞあねば其風信義ありて慈寡ありし
 のとふくは人の妻ある者皆謙讓貞節あるが故に家
 毎に家内和合しより實に感歎をばき美俗あるはや
 今歐羅巴諸國の風と視るよこの美俗當今に傳はり
 其上西教の教盛んよして萬事盡く開化すること全
 く造化の恩徳あるべし

第六紀の頃佛郎西は三部の人住ひたり北及び中央
 には佛郎哥人あり西南には維西俄的人あり東南は
 と不爾給農人ありたり但しセルツ人即ち哥及び羅
 馬より移りし人も此國に住居しつれども皆三部の

人は屬しつり佛郎哥人の二大部に分ち一は色利安
 佛郎哥人として今の白耳義の地に住ひ二はハリプアリ
 アン佛郎哥人として下里尼河の邊りに住ひたり今に
 尚女と王とをわることふき國法譬へは佛郎と色利安
 法といひ色利安人の名残あるあり上よりは哥路
 易と則ち色利安人の長あり此人のもと身分貴き者
 は非されども其才智を以て此位に至り諸所は於て
 武功を立てしとき僧徒等其徳を稱し且つ東帝より
 金冠紫衣を賜ひよよりて遂に夷王とあり巴勒は
 都しつり其國にては毎年の春兵士會合して事と議
 しつり會名を「シャンドマルス」の會といひつり府城

と昔しの羅馬國法を用ひて其郡の知事官グロバと
 之を支配しきり哥路易コロニスの後嗣を髮を長して田舎に
 住ひ更は國政を知らず唯毎年后と共に牛車ウラを乘り
 てシマンドマールスの會に出駕ウラあり佛郎
 西國を佛郎哥人の地あるを以て斯く名つけしとい
 へども今の佛人ハ大半セルツ人の後胤あり
 含太爾亞蘭不爾給農フエーブス四部の人の俄的人
 の攻撃を屈して里尼河の源と多腦河との間ある高
 き地を去りたり其時不爾給農人の佛郎西の東地を
 住ひしが幾もあつて哥路易に従服しきり此民ハ此地
 又於て或ハ農民或ハ工人とありしが久しき間昔の

夷風を守りたる就中開けざるハ妻を賣買を習ひ
 しゆりたり含太爾スエーブス二部の人は是班牙に
 入りて此國の西北隅は一箇の國を起しスエーブス
 人のそとより此地にゆりしが維西俄的人の為に滅
 されり但し含太爾人の猛き夷ありしやバ紀元四
 百二十八年に於て亞弗利加に渡り其北地を打從へ
 又小船を以て地中海に浮び諸方を掠めて大に富を
 しが後懦弱とありしやバベリサとリスの為に滅さ
 せたり委は
 羅馬人諸夷を賤しめて俄的人を奇しき風俗の田
 舎翁と渾號し含太爾人への風雅の趣よく名高き古

禹碑銘を壞つことと樂めり畜生と號しきり
 倫巴爾人の進ビニツトランド路筋の既上より其もと住
 ひし地を入ビニツトランド德蘭ありスカウ河の邊りより其地よ
 り巴郎德不爾厄の平地に徙りたり然る處大水出て
 家を流るに至りしことわりしうバ倫巴爾人皆エル
 べ河の邊りより水と避け後又東南多腦河の邊り徙
 り又其地を去て伊太利國に攻め入りたり今倫巴爾
 治ビニツトランドとりの處に即ち其民の攻め取りし所あり
 撒克遜人のもとホルステーンに住ひし夷ありしが
 後スツセル河の流る所の地に徙りたりこの夷と
 近き胤の民種はアングルス及びビジュツテスといへり

二部の夷ありしが是の連馬に住ひたり三部皆テウ
 トン種即ち日耳の夷より眼の青く髪は赤く若し
 くハ黄より類を薄紅あり三部の人ブルテレン不列顛を攻む
 ることこの曆史中の頗る至要なる事件あり委しくハ
 録外篇この時不列顛の舊民セルツ人を山中に退き西洋易知
 長劍短刀斧鉞を以て自ら防禦の謀をふし不列顛の
 セルツ人と同し胤の民を阿爾蘭の住民より此民
 を博奕漢獵牧蓄を業とし此項の昔より詩樂巧
 とあり紀元四百三十二年蘇各蘭の僧パトリック此國
 に至りて耶蘇教を説法しきり五百六十三年に於
 て阿爾蘭の僧コロンバ蘇各蘭に至りて同し教を説

法しきるを奇らしき譚あり

テウトン種の諸夷とセルツ人と衣服政法職業宗音
 又於てハ大ニ相異ありテウトン人を幅廣き粗末
 あり長き衣を着して木刺まきさしを以て其襟をとめ少き者
 ハ常ニ鍔の領を用ひ戦場ニ於て首級を取らる上ふ
 らでを之を捨ること能ハざりしテウトン種の中最
 猛き夷ヒンハバタを戦場ニ於て首一級を得ると
 きハ髪を切り一度盡く之を剃りたりセルツ人即ち
 人々之と違ひて靚麗あり衣服を好む且つ腕若しく告惡
 ハ頸ニ金鎖を懸るり今蘇各蘭ネフトラントの山ニ住む人の用る
 タータン蓋し衣服名未詳の聲色あり物あり及び佛蘭西人の

衣服の風をセルツ人の製度り今ニ残るるありテウ

トニ人の共和政治を好むセルツ人の貴顯政治を用ひ
 テウトン人を戦争と業とふしセルツ人の耕作牧畜
 を好む且又セルツ人を「ドイヂスム」宗音と奉じて
 久しき間之を變せざりしがテウトン人を之ニ及し
 てもとより唯一箇の上神信に信じてありテウ
 ハ直ニ耶蘇教ハルビドを従りたり
 和蘭ハルビドの里尼河ラインの流るるとき次第ニ其泥土を押し上
 がりより成り多る地として古を大なる沼として其
 海岸ウラの彼處此地ニ森林ウラ沼中の堤上ニ魚を食
 ふ夷住ひありしが或時水大ニ出て此夷を流したり

後ち日耳曼の一猛夷カチ人の一隊此地に住ひ大半之を固地とふし之をバトリーと名けり今和蘭人の其後胤ありスカンデナヒア人又ノルスマ人の事を三の巻に至りて論をへし

昔し歐羅巴北地の寒き海岸のヒンズ人住ひたり此民をモンゴル人種の一部として髪黒く性質溫柔ありし民あり今のラプランド人の即ち其後胤あり後サルマチアンス人サルマチアンス人の緑眼人種とせり名あり然し此民を自らスクラホニア種と云ふことありとハ狭勇人種と云ふことありとヒンズ人を攻め打ち其地を押し領したりサルマチアンス人を車と列強と城とふし戦ふときハ兵卒等粗

布の胸當を着し一二匹の瘦馬を引て進み戦ひ魚骨の毒を漉きて之を箭鏃槍尖とふし其宗昔ハドロイヂスム教に似るる一種の宗旨ありさて又此民の風俗より快より劣る習ハし多うりま中より其敵を勝ちるととき皆悦て敵の首を盃とふし血を飲しハ言語は絶へし悪俗あり

波蘭の國ハスクラホニア人の一族リアエックス人之に住居し昔しより盛んある國あり其戦は趣くや農民の楯と槍とを持して歩きて戦ひ貴人の冕たる甲冑を着して馬上にて戦へり且又黒海と波羅的海と交易するハウイスナラ河を通行するを以て波

蘭^{ラド}の^{ウラル}を^カ之^カが^カ為^カる^カ益^カ富^カと^カ重^カん^カん

烏拉^{ウラル}山の方より西入し多る許多の夷兵の代^{ウラル}々皆カ
ル^カバ^カチ^カア^カン^カ山の^カ陝^カ路^カを^カ越^カて^カ多^カ腦^カ河^カの^カ邊^カり^カ下^カり^カし
グ^カワ^カグ^カも^カ一^カ度^カの^カ匈^カ牙^カ利^カの^カ地^カを^カ押^カし^カ寄^カせ^カり^カ俄^カ的^カ
人の^カ第一^カは^カ此^カ地^カを^カり^カし^カ匈^カ奴^カ人の^カ為^カる^カ奪^カり^カ後
又^カア^カバ^カル^カス^カ人^カズ^カル^カガ^カリ^カア^カン^カス^カ人^カマ^カグ^カヤ^カル^カス^カ人^カ代^カる^カ
此^カ地^カを^カ押^カ領^カし^カマ^カグ^カヤ^カル^カス^カ人^カの^カ紀^カ元^カ八^カ百^カ五^カ十^カ五^カ
年^カは^カ於^カて^カ此^カ地^カを^カ取^カり^カし^カ民^カを^カ其^カ開^カけ^カざ^カる^カ事^カと^カ治^カ
と^カ匈^カ奴^カ人^カと^カ異^カふ^カら^カみ^カ常^カに^カ馬^カを^カ食^カし^カ強^カ弓^カと^カ
彎^カき^カ艶^カある^カ色^カの^カ旗^カを^カ附^カけ^カる^カ槍^カと^カ面^カを^カ扱^カひ^カ付^カり^カ此^カ
民^カ匈^カ牙^カ利^カの^カ来^カり^カし^カより^カ暫^カ時^カの^カ間^カは^カ開^カ化^カを^カ進^カめ^カ其^カ國^カ

藝^カ業^カ耕^カ作^カ貿^カ易^カ一^カ時^カは^カ盛^カ大^カと^カあり^カ紀^カ元^カ千^カ年^カ頃^カ耶^カ蘇^カ教^カ
門^カは^カ徒^カり^カ追^カて^カ美^カ俗^カの^カ民^カと^カあり^カ紀^カ元^カ千^カ四^カ百^カ五^カ十^カ
六^カ年^カは^カ匈^カ牙^カ利^カ人^カベ^カル^カグ^カラ^カド^カの^カ城^カ外^カに^カ於^カて^カ土^カ耳^カ其^カ
の^カ強^カ兵^カと^カ勇^カ戦^カし^カ十^カ日^カの^カ間^カは^カ三^カ度^カ之^カを^カ破^カり^カし^カ近^カ
年^カ暴^カ政^カに^カ敵^カ抗^カし^カて^カ勇^カ戦^カし^カる^カ事^カと^カ諸^カ人^カの^カ深^カく^カ感^カ
歎^カせ^カる^カ事^カあり^カ後^カに^カ委^カしく^カ説^カく^カん

西洋易知錄卷之二終

西洋易知錄卷之二附記

第二世聞人の姓氏

シドニースアポリナリス

紀元四百二十八年告ガ惡ヲ

爾ニ生ル○アルベルニのビソフあり○テオドロッ

クニ寵愛せり○其作ル所詩賦書簡ハあり○四百

八十四年死ス

ギリシヤノ史家あり○著ス所羅馬國史ハあり

ギリシヤノ史家あり○著ス所羅馬國史ハあり

如地尼安帝ノ宮中ニ仕へり○名高キ文法家ニ

して著ス所希臘ノ文法ハあり

ブリーチユース 紀元四百五十五年羅馬城に生る。○オ

ドアセル及びテオドロクに仕へて江士コンシユル官あり。○

臘丁理學家あり。○パヒアの獄中よりしりしと凡理

學書を著せり。○五百二十六年に於て刑せらる。

プロコピウス 第五紀の末に於てセーサレーに生

る。○ゲヨスチニアン帝の宮中に仕へり。○嘗て其

時代の記録を著し又知地尼安帝宮中の紀事を述

べし書を著せり。

カシオドロムス 紀元四百七十年頃生る。○テオド

ロククの書記官あり。○其著を所儀的史記ヒストリヤなり又用

字學の書及び生徒を教ふる法を論せし書と著るを

紀元百歳よりして死を

ツォルスのグレゴリー 紀元五百四十四年オーベ

ルンに生る。○ツォルスの「ヒソップ」あり。○嘗て臘丁

語を用て佛郎西國史を著せり。今の史家「メロウイン

ヂアン」朝諸王の事を述べり。其書の説は據る

オーギュスチン 羅馬のレントアンデレウ寺院の主

僧あり。○紀元五百九十六年教公グレゴリー第一

の命を奉じて英國に趣き耶蘇教を説法しり。○

カンテルバリーの「アルチビソプ」とあり。六百七年

頃此地に於て死せり。

ベード 紀元六百七十三年頃ソンドランドに生

○英吉利の桑門あり○人之を稱して「ヘ子レ」
 ブルモクと號せり是を蓋し其徳行を賞せしふ
 多べし七百三十四年頃英國教門キリストの記録を著せり
 ○其翌年死を

ウイニフレット 紀元六百八十年頃デボンサイルゼルに

生る○後改名してボニヘリスと云へり○日耳曼
 及び於て三十年の間法を説きたり○後マエンスの
 「アルチビツプ」とある○七百五十五年フリリアン
 ス人の為を殺さる

○六百八十年頃デボンサイルに生る○後改名してボニヘリスと云へり○日耳曼及び於て三十年の間法を説きたり○後マエンスのアルチビツプとある○七百五十五年フリリアンス人の為を殺さる

第二世の紀事の表

哥路易ソイソンス戦は武功を顯を	紀元
澳斯土羅俄的人伊太利を平く	四百八十五年
哥路易巴勒は都を	四百八十八年
アルチュル系列顛は王多り <small>但し真偽未詳</small>	五百十年
如地尼安帝位は即く	五百十五年
ベリサリュース亞弗利加は勝つ	五百二十七年
ベリサリュース伊太利は勝つ	五百三十三年
ベリサリュース又伊太利を攻む	五百三十六年
	五百三十九年

リアマックス人波蘭の國を建つ	五百五十年
絲と製造する法歐羅巴に傳はる	五百五十一年
伊太利澳斯土羅俄的の國滅ぶ	五百五十三年
倫巴爾人伊太利を侵掠す	五百六十八年
馬荷美德生る	五百七十一年
オリギヌスチン英國に趣きて説法す	五百九十六年
馬荷美德メジナを奔る	六百二十二年
馬荷美德死す	六百三十二年
オマル耶蘇撒冷城を取る	六百三十七年
亞刺伯人又サラセン人剛士但知腦布爾を攻む之を圍むごと七年遂に去る	六百六十八年

西教の高僧剛士但知腦布爾の會を	六百八十年
亞刺伯人は是班牙を攻む	七百十一年
亞刺伯人又剛士但知腦布爾を攻む	七百十六年
查理馬突耳亞刺伯人と大にツール	七百三十二年
スに戦て之を破る	七百三十二年
亞刺伯人アバシエード族亞刺伯の王	七百五十年
位を奪ふ	七百五十年
北比諾位を即く	七百五十二年
北比諾エキサルクート及びペンタ	七百五十四年
ポリスの地を教公に與ふ	七百五十四年

西洋新子金

卷之二

知事會

回々教の國コルドハ興了

七百五十五年

查理曼佛國と一紛を

七百七十七年

西洋易知録卷之二附記畢

六百八十年

